

短期集中  
連載

「近代日本を歪めた天皇制絶対主義」  
という俗説の正体

あらひとがみ

# 「現人神」を

# 一人歩きさせたのは誰か

皇學館大学助教授・につたひとし

新田 均

「教育勅語」の準公定解釈と学校行事

「帝国憲法」と「教育勅語」の起草の中心者であった井上毅は、明治初期の教訓から国民の尊皇心の最大公約数を探求し、それを「天皇と国民との協働関係」という歴史の中に見出した。そこには、天皇の位置づけをめぐる哲学的・宗教

的な対立が起きたり、それに巻き込まれたりすることを避けたいとの思いがあった。

それでは、このような意図を含んだ憲法・教育勅語体制は、天皇論をめぐってどのような社会状況を生み出していったのだろうか。政府要路に「天皇の絶対神化」という意図がなかったとすれば、そのような思想は、いつ、誰によって、どのような理由から唱えられるようになった

たのだろうか。教育勅語の発布直後から大正末ころまでの時代をながめてみることにしたい。

井上毅自身の憲法・教育勅語に対する考えは冒頭に述べたようなものだったが、その認識を文部行政全体に徹底させることまではできなかったようだ。文部省が井上哲次郎に委嘱した教育勅語の解説書の草案の中で、「皇祖皇宗」の解釈についての考えが、井上哲次郎と井上毅

との間で食い違っていたことについては前回述べた。哲次郎が、「皇祖」天照大御神、皇宗「神武天皇」と解説していたのに対して、毅は日本の建国から述べる場合には「皇祖」神武天皇、皇宗「歴代天皇」と理解すべきだとの修正案を提出した。

この点に関して、解説書の成案では、一応、毅の考えが採用されて神武天皇が建国の祖として記述された。しかし、他方で、毅の修正案にはなかった天照大神を「天祖」とする記述が、神武天皇についての記述の前に追加されて、両者の考えを足して二で割ったような記述となっ

ている。すなわち、明治二十四年刊行の井上哲次郎著『勅語衍義』では次のように書かれている。

「太古ノ時ニ当リ瓊瓊杵命天祖天照大御神ノ詔ヲ奉ジ、降臨セラレテヨリ、列聖相承ケ、神武天皇ニ至リ、遂ニ奸ヲ討ジ逆ヲ誅シ、以テ四海ヲ統一シ、始メテ政治ヲ行ヒ民ヲ治メ、我ガ大日本帝國ヲ立テ給フ、因リテ我邦ハ神武天皇ノ即位ヨリテ國ノ紀元ト定ム、神武天皇ノ即位ヨリ今日ニ至ルマデ、皇統連續、実ニ二千五百五十年ノ久シキヲ経テ、皇威益々振フ、云々」

この「勅語衍義」は井上哲次郎個人の著書として刊行されたが、元来が文部大臣の委嘱によるものであり、しかも教育勅語の起草者である井上毅と文部大臣の芳川顕正とが意見をつけたものだったから、教育勅語についての準公定解釈書としての扱いを受け、版を重ねていった。だから、ここで哲次郎と毅の考え、つまり天皇「神孫」論と君臣「徳義」論とが併記されたことの意味は小さくない。

ただし、教育勅語発布の当初は、井上毅的な考えが主流であったことは間違いないようで、同じく明治二十四年に文部省が定めた「小学校教則大綱」は、日本史では「建国ノ体制」からはじめて、「皇統ノ無窮、歴代天皇ノ盛業、忠良賢哲ノ事蹟、国民ノ武勇」などを教えるとして規定した。事実、当時は小学校教科書の「検定時代」にあたるが、この「教則大綱」に従って編集された『帝国小歴史』（学文社、明治二十六年刊）や『日本歴史』（金港堂、明治二十七年刊）といった教科書は、神話を省いて神武天皇から記述をはじめ、その神武天皇が天皇陛下の御祖先だと説明している。

この記述が変化するのは明治三十二年頃からのことで、神武天皇についての記述の前に、「天照大神」「三種の神器」「天孫降臨」などの項目が追加され、その中で天照大神が天皇陛下の遠い御祖先で、神武天皇は人皇第一代であるとの説明がされるようになった（『帝国史談』学海指針社、明治三十二年）。『小学国史』

新田 均氏 昭和三十三年（一九五八年）長野県生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程に学ぶ。神道学博士。近代日本の政教関係を中心に学際的な立場から実証研究を行っている。平成十年「比較憲法学会・田上稔治賞」受賞。著書に『近代政教関係の基礎的研究』（大明堂）、『靖国神社をどう考えるか』（共著、小学館文庫）など。

普及社、明治三十四年など。これについては、日清戦争以降に忠君愛国教育の徹底を求めるようになった帝國議会の議論を受け入れたことだったと云われている。

そして、この記述形式が明治三十七年以降の国定教科書に継承されていったのだという（海後宗臣『歴史教科書の歴史』）。とすると、どうやら、時代変化の影響で、明治三十年代に『勅語衍義』の路線が小学校の日本史教科書に反映されるようになり、それが天皇「神孫」論と君臣「徳義」論とを二本柱とする修身・日本史の国定教科書の原型になったようだ。

ところで、生徒たちの尊皇心の涵養については、授業における教授以上に、学校行事を通じての喚起が重視された。国家の祝祭日における学校行事は初代の文部大臣・森有礼によって明治二十一年に導入されたのだが、それ以降に煩雑化していった。それを整理し、確立させたのもまた明治二十六年に文相に就任した井

上毅だった。井上文相の改革によって、元旦、紀元節、天皇節において、両陛下の御真影への最敬礼、両陛下の万歳奉祝、教育勅語の奉読、校長の訓話、式歌斉唱、という学校行事の基本形式が整った。

この改正の趣旨を説明した井上文相の内訓は、学校行事開催の意義を「我國民忠勇の徳性を、冥々の間に発動萌芽せしむること」（傍線引用者）と説いている。ここにも、教育勅語において形而上学的な議論を避けようとしたのと同種の考えが形を変えて現れている。つまり、理論化して統一しようとするれば対立分裂の恐れがある多様な尊皇心を、理屈抜きで包摂し、知らず識らずの内に喚起することが学校行事に期待されたのである。

学校行事について補足すると、日本大学教授の佐藤秀夫氏は、「御真影」という言葉は本来仏教用語でそれへの敬礼は仏教感覚に準拠しており、「式歌斉唱」は初代文部大臣の森有礼がキリスト教礼拝式の賛美歌斉唱から学んだものではな

いかと推測している（『続・現代資料8 教育 御真影と教育勅語I』（みすず書房）の「解説」）。そうだとすれば、学校行事の式次第にも、國民の多様な宗教感覚を包摂することによって尊皇心を喚起しようとする努力がなされていたと言えそう。

#### さまざまな民間の注釈書

このような自己抑制的な政府の姿勢の結果なのだろう。「教育勅語」発布の後、民間では様々な立場からの解説があらわれた。井上毅の意図をかなり正確に読みとった解釈もあり、もちろん、神話を主要な根拠とした解説書も多く出版されている。しかし、その一方で、仏教やキリスト教の立場にたった解説書も出版された。

例えば、太田教尊は、明治二十七年二月に『勅語と仏教』という解説書を出版し、その冒頭において、次のように言い

放った。「仏教は支那日本に伝来して始めて國家を重むし忠孝義倫を教へたるにあらず、其根本の教理に於て既に之を論定したり」（日本大学精神文化研究所・日本大学教育制度研究所編『教育勅語関係資料』第九集）。仏教には元から尊王思想が内在している、というのだ。

この理由を太田はこう説明している。「我仏教に於ては、社会の人類に尊卑上下貧富貴賤の差あるは皆過去の宿因によるものなれば、互に之を害すべからず。懸けまくも一天万乗の尊き身に生れて四海の君王となり給へるは、然るべき原因ありて然るものなれば、決して之を侵すべからず。人の臣と生れては其君に忠を尽さざるべからず。つまり、仏教の因果応報の思想によって尊皇を説明しているのである。

キリスト教の例を挙げると、正教会の石川喜三郎が、明治二十六年七月に、聖書に基づく「教育勅語」の解説書を『勅語正教解』と題して出版している。この中で、石川は天皇統治の根拠について、

次のように書いている。

「みなこれ神造物主の深き神意に因らざるばあらざるなり。神我國に万世一系の皇統を定めて、その万民に幸福せるは実にこれ世界無比なることがらにして亦神恩の高大なるを認めざるべからず。我國の皇統はかかる神の特恩によりて、この大日本國の皇統と定まりたる者なれば『我に由りて列王は王たり』我に由りて牧伯諸侯天下の士師皆君たり」（箴言第八章第十五節）と云ふ神の言を服膺し我等國民は度みてこの開國の祖たる皇祖を敬ひ尊びつゝその皇孫に臣事せざるべからず」（『教育勅語関係資料』第四集）。全知全能の神こそ世界の主宰者なのだから、日本に皇統が続いてきたのも神の思召しによるのだ、という訳である。

こう述べた後で、石川は勅語に掲げられた徳目の意味を一つ一つ聖書を引用しながら説明し、最後に、皇祖皇宗は神造物主の命に最も従順だったのであり、その遺訓が「教育勅語」なのであるから、これを尊重実践しない者はキリスト教徒

ではないと結んでいる（同書）。

ちなみに、国史学者の重野安繹は、帝國大學における「教育勅語」の拝読会で、勅語の要旨は「儒教主義と云ふも不可なかるべし」と発言し、このために、徳富蘇峰が主宰していた民友社の機関誌『國民之友』誌上で、次のような批判を浴びせられている。

「陛下の勅語は語少くして意大なり。儒教者も以て此勅語の恩沢に浴すべく、仏教者も以て其恩沢に浴すべく、基督教徒も以て其恩沢に浴すべく、神道家も以て其恩沢に浴すべく、総て日本國民なる分限を有する者は、皆此の無量の勅語中に徜徉するを得べきなり。何ぞ必ずしも儒教に限らん、何ぞ必ずしも教育の方針を儒教主義にせよと限り給ふことあらんや」（明治二十三年十一月十三日、國民精神文化研究所編『教育勅語漢英關係資料集』第二巻）。

このように多彩な解説が公刊されている事実を見ると、政府の腹の内は「民間においては、尊皇という線を守っておれ

ば、その根拠づけ、納得の仕方については、基本的に自由な解釈を許す」といったところではなかったかと思われる。こう言うと、教育勅語発布当時、内村鑑三が「教育勅語」の「御名御璽」への礼拝を拒否して問題化した不敬事件（明治二十三年）や、歴史学者の久米邦武が「神道は祭天の古俗」という論文を発表して糾弾された事件（明治二十五年）を引き合いに出して、政府はそんなに寛容ではなかったはずだ。現に気に入られない思想を弾圧していたではないか」との反論が返って来そう。そこでこれらの事件についても一言しておこう。

確かに、これらの事件は一見政府による思想統制、思想弾圧のように見える。しかし、実際に彼らを批判し離職に追い込んだのは激高した学生や教員、民間の神道家や国学者たちだったのであり、そこに政府の積極的な関与を読み込むのは強引すぎる。政府はただ彼らを「守らなかつた」だけである。最近、栃木県で、一部の人々の圧力によって、地区採択協

議会において一旦決定した中学校歴史教科書の採択が覆されるという事件があった。あれを外部の圧力に教育委員会が屈した事件ということはできても、特定の教科書に対する政府による弾圧事件と云うことはできない（国立市長による特定の教育委員はずしは「権力」による弾圧と言えるかもしれないが）。基本的にそれと同じ話である。だから、こう付け加えれば十分だろう。尊皇に対する公然たる否定や反抗、あるいは社会において物議を醸すような事態は困るが、そうでない限りは干渉しないというのが政府の姿勢だった。ようだと。いつの時代も役人の体質というものは、それほど変わらないということだろう。

#### 日清戦争以降における「家族国家」論の流行

ここで、教育勅語を離れて、もっと視野をひろげて、その後の社会における天皇論の推移を見てみよう。この場合に打

ってつけの便利な書物がある。大正十年に内務省神社局が刊行した『国体論史』がそれである。これは江戸時代から大正時代までの様々な国体論の要旨をまとめたもので、ここに盛り込まれている議論を追っていくと、日清戦争以後から明治末年にかけての期間に、天皇と国民の祖先は同じであるとする「君民同祖」論に依拠した「家族国家」論が次第に言論界で有力になって行ったことが読みとれる。

例えば、天皇主権を唱え、美濃部達吉と鋭く対立したことで有名な憲法学者・穗積八束は明治三十年に刊行した『国民教育・愛国心』の中で「吾人の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は国民の始祖にして皇室は国民の宗家なり」「我が統治権は之を国民の始祖に受け之を其の直系の子孫に伝ふ。皇統は民族同祖の直系正統の子孫にして皇室は国民の宗家なり」と書いている。

高山樗牛も同年、雑誌『太陽』に発表した「我國体と新版図」の中で、「此帝國の国土は皇祖皇宗の創定したる所、其

国民は概ね神孫皇族の末裔にして、祖先以来皆是域内に生息し、一系の皇族に奉仕したりしなり。即ち皇室は宗家にして臣民は末族なり。建国当初の家族制度は二千五百年を経由して大に其範圍を拡張したるも、其本来の精神には異変あるなし。我國体の特性は此君臣一家てふ国民的意識に起源せるものなり」と論じている。挙げていけば切りがないが、以上のような議論を基本として、それに神代の出来事や天皇「神孫」論、国民「神孫」論や祖先崇拜・忠孝一本の強調などがバリエーションとして加除される形で、大正十年代までの国体論の主流が形成されていったようだ。

このような思潮の中で、井上哲次郎

も、明治三十二年に改訂した『勅語衍義』の中に次のような文言を加えて、「家族国家」論を採り入れた。「我日本ノ国家ハ古来家族制度ヲ成シ、国ハ家ヲ拡充セルモノニシテ、家ハ国ヲ縮小セルモノナリ。（中略）即チ孝ヲ拡充シテ直ニ忠トナスヲ得ベキナリ。忠ト孝トハ其名異ニシテ其实一ナリ、是故ニ是レヲ忠孝一本ト称スルナリ。忠孝一本ノ主義ハ、我日本ノ国家ヲシテ永遠ニ継続繁栄セシムル所以ナリ」（『教育勅語関係史料』第一巻）。

次いで、明治四十年代に入ると、社会主義者・無政府主義者が明治天皇の暗殺を企てたとされる「大逆事件」が世間を驚愕させた。これによって道徳教育の強

化を迫られた文部省は、その対策の一つとして、明治四十三年の十二月、井上哲次郎に委嘱して師範学校修身科担当教員のために国民道徳についての講義を行わせた。さらに彼は、同じく文部大臣の委嘱によって、明治四十四年七月にも中等教員講習会で国民道徳を講義し、これをもとにして明治四十五年七月に『国民道徳概論』を刊行した。

この書物の中で井上は「家族国家」論に基づく国体論を体系的に説明している。その詳細は省略するが、私はこの本の中で、「天壤無窮の神勅」について書かれてある次の箇所に興味を引かれた。「是れ「天壤無窮の神勅」が日本の歴史の初に提出された将来の大理想でありま



す。何時でも何か非常の時には之に立返つて国運の新発展を来すやうになつて居ります。さう云ふ訳で、国民の精神を中心に引締める丈の効果が確にある。必ず是れに立返つて此趣意を失はない。さうして之を自己の精神として活動して来る処に、民族の発展が出来る。そこでさう云ふ精神的の者が日本には古来歴史上伏在して居るのであります」

つまり、井上は「天壤無窮の神勅」を歴史事実としてではなく、日本人の民族精神の中に潜在している「理想の表現」として捉えるべきだと主張し、その理想が「万世一系の皇統」という歴史事実となつて現れていると解釈すべきだ、というのである。

さて、その後、「国民道德」は高等学校・師範学校その他の諸学校で必修科目とされるようになり、文部省の教員検定試験にも必ず出題されるようになっていった。こうした流れの中で、井上の国民道德論は政府の「御用学説」として、教育界において最高の権威と認められるようになった。

うになった。彼の『国民道德概論』も中等学校教員検定試験の必須参考書とみなされるようになり、全国の師範学校や高等学校の修身倫理科の教科書としても使用されるようになっていった(福田正次『教育勅語成立過程の研究』)。この状況は大正末年頃まで続いたようだ。

### 日本神話ぬきの天皇論

このように、明治四十年代から大正時代にかけては、「家族国家」論が主流化していく一方で、尊皇ではあるけれども、神話を根拠とすることには否定的だった。日本神話とは無関係であつたりする議論も現れた。

大正デモクラシーの旗手の一人であつた美濃部達吉は、天皇統治の根拠を「国民の確信」におき、その確信を表現した「大日本帝国八万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」との帝国憲法第一条は「万世に亘つて動かすべからざるものであります」

(大正七年『憲法講話』)と主張した。しかし、その一方で、「君主が神若しくは神の子孫又は其の代理人」と認められた時代もあったが、このように「君主を神格視すること」は、君主を国家内にある国家の一構成要素とみる思想―すなわち天皇機関説―とは「絶対に調和することが出来ない」とし、「家族国家」論についても「全国民が同一の祖先から出たとする神話の伝説と其の祖先の神霊が君主に伝はつて居るとする宗教的信仰」とに其の基礎を有するもので、君主を神なりとする思想の一派(大正十年『日本憲法・第一巻』)であるとして否定している。「国民の確信」たる尊皇は大切だが、その根拠として神話を憲法論に持ち込むことは認められないというのである。

このように天皇の神格を無視するような議論が展開される一方では、キリスト教式の天皇「神孫」論とでも言うべき議論も現れた。日本プロテスタントの指導的な立場にあつた人物で、第二代同志社社長をも務めた小崎弘道は、大正二年に

出版した『国家と宗教』という書物の中で、次のように書いている。

「我が国が神国であつて其皇室が天孫であり、其国体が特別な国体であると云ふ事は決して吾人の信仰と衝突すべき者でない。唯吾人は神国を以て我が国斗りでない、他の国も神国であり、否世界中は一として神の国であらざる所はないとするのである。又我が皇室のみが天孫であるばかりでなく、何れの皇帝も何れの国王も天孫であらざるはない。尚ほ弘く之を云ふ時は天下万民は悉く天孫ならざるはない。然れども同じく天孫でも其使命は人々によつて異なつて居る。我天皇陛下に於ては世界列国の間に特別な使命を有する我国民の上に神命により君臨し給ふ御方であれば、吾人が天皇陛下に対し我皇室に対し特別の尊敬を払ひ日々特別の祈禱を捧ぐ可きは当然の至りである」

ところで、「神道は祭天の古俗」を書いて東大を追われた久米邦武はその後も健筆を揮い、東京専門学校(後の早稲田

大学)の講師に就任する直前の明治三十二年二月に「国体論」と題する論文を雑誌『太陽』に発表している。そこで彼は、「君民の結合心」の重要性を認めつつも、「天壤無窮の神勅」については、『日本書紀』の正文ではなく、諸家の異説を伝えた「一書」にあるにすぎず、「漢文の書様にして、其中に深き旨趣も含まぬ祝辞なり」と言い、君臣間の徳義についても、朝廷内の権力闘争の歴史に言及して「決して日本は皇室貴族の間に篤き氣風を存するなど、無稽の談は待みがたし」とか、「日本の臣民が皇室に於る特殊なる忠愛の尊質に存すなどいひて決して油断はならざるなり」などと指摘し、結局、国体論などというものは「恋旧心より起りたる迷想なり」と切り捨てている。この論文がどの程度世間を騒がせたのか、騒がせなかったのかは定かでないが、ともかく、発禁処分にはならず、東京専門学校講師への着任が妨げられることもなかったようだ。

さて、ここまで様々な議論を見てきた

が、それらの共通点を一言でいえば、「天皇を中心としたこの国」ということだろう。明治中期から大正にかけての日本政府は、公教育においては天皇「神孫」論と君臣「徳義」論とを柱とするが、社会一般においては「天皇を中心とした国」という枠組みさえ尊重しておれば、「この」の部分については、「神」でなくとも、「仏」でも、「基」でも、「儒」でも、「立憲政体」でも、もちろん「家族国家」でも、基本的には構わないという態度だった。

### 現人神の創作者たちの登場

このような自由な空気の中から、昭和の「現人神」論に通じる思想も姿を現しはじめた。私の見るところ、その先駆けとなった人物は、浄土真宗の信仰を持ち、東京帝国大学で宗教学を教えていた加藤玄智である。彼は、日露戦争以降に神道を研究する外国人が現れてきたのに

刺激されて神道研究をはじめ、その成果を明治四十五年に『我が国体思想の本義』と題して刊行した。

この中で彼はまず東京帝国大学名誉教授で日本研究家のバジル・ホール・チェンバレンが明治四十四年に発表した「新宗教の発明」という論文を取り上げて、『外国人研究者には日本の真相が十分に分からないために、誤解が外国にひろがる恐れがあり、したがって日本人自身があるのまゝの日本を外国にも伝える必要がある』とその執筆動機を語っている。加藤が問題視した論文においてチェンバレンは、日本人の天皇崇拜などというのは、欧化主義の流行によって国民の愛国心が失われることを恐れた政府が、明治二十年以降に生み出した新しい宗教に過ぎないと断じている（『日本事物誌1』平凡社東洋文庫）。

これに対して加藤は、天皇崇拜の由来の古さを指摘し、宗教学的観点からその意義を解説して、チェンバレンの議論を批判しているのだが、その中に、これま

での論者には見られなかった議論が登場して来ている。

加藤はまず、「日本人は皆神の子」「天皇陛下は殊に秀でて神の御子孫」という従来の説を一応は肯定しつつも、「否、代々の天皇陛下は、一方から申しますれば、天神の神胤、即ち神の子と申すことが出来まされども、亦他方からは、陛下のことを明神とも亦現人神とも申し上げてをるのでありまして、神より一段低い神の子ではなくして、神それ自身であるといふことであります」と、「神孫」論と「現人神」論との区別を提唱した。

そして、古来天皇は「至尊」「至上」「上御一人」と呼ばれており、ここから「明らかにバイブルにおける神の位置を日本では天皇陛下が取り給ふて居つた」と言い、「日本に於きましては天皇陛下に対し奉る時は吾々臣民は絶対的服従であります、西洋に於きましては、歴史的に神に対して絶対的服従を要求されて居ることになつて居ります」と主張した。絶対神的天皇論の登場である。彼は、この

日本人の精神の在り方を「天皇帝」と呼び、「西洋にあつては即ち神、日本にあつては天皇陛下、西洋にあつては宗教上の信仰、日本にあつては忠孝一本、西洋にあつては基督教、日本にあつては天皇帝」という対応図式を提起している。

加藤はこれ以後多くの著書を通じて、この考えを国内に広めていった。そればかりでなく、英文の著書も刊行して海外へも宣伝した。特に彼の議論が大東亜戦争中のアメリカ人の天皇観・神道観に与えた影響は大きかった。というのも、アメリカのもっとも辛辣な神道の批判家であつて、アメリカ人の通説的な神道観を形成したと言われるD・C・ホルトムは、加藤の影響を強く受けた人物だったからである。ホルトムはその著書『Modern Japan and Shinto Nationalism』（一九四三年）の中で、加藤を「近代神道復興の解説者としてももっともよく知られている」人物であると紹介した上で、加藤の説を次のように引用している。

「博士は『中国人の中で天と上帝が占める地位、あるいはユダヤ人の中でエホヴァの神が占める地位は、日本では古くから天皇が持つておられた』と述べ、また『天皇は昔から「あきつ神」（眼に見える神）、「あらひと神」（人間の姿をした神）および「あらみ神」（人間の姿をした大神）と呼ばれて来た』といっている」（深澤長太郎訳『日本と天皇と神道』）。

## 学問という営みの重大な影響

このホルトムの著述の影響は、アメリカ国内にとどまらず、敗戦後の日本にも及んでいる。国学院大学の大原康男教授

によれば、占領軍が国家と神道との分離を命じた所謂「神道指令」を起草したW・K・バンスが熱心に読んだのがホルトムの著書であり、「神道指令という国家神道の定義がホルトムの神道観に全面的に依拠していることはほぼまちがいあるまい」（『神道指令の研究』原書房）ということだ。

『西洋人のゴットに対する信仰にしても歴史事実には照らせば疑惑を生むべき要素が様々ある。それにもかかわらず、彼らは神の存在を否定せず、神への忠誠心を維持している。だから、その神と天皇が同じようなものだと言明すれば、さすがに西洋人も合理主義を持ち出して日本人の天皇に対する忠誠心を批判するのは難

しかろう』というのが加藤の思惑だったのかもしれない。とすれば、どうもそれは当てが外れたようで、自らの不合理性を省みて日本批判を遠慮するのではなく、むしろ日本人は人間を絶対神と同一視するところでもない民族だとの驚きをまじえた嫌悪感を西洋人の間に広めてしまったようだ。加藤は今日では忘れ去られてしまった学者の一人なのだが、一学者の主張が日米関係に及ぼした影響の大きさを思うとき、私は学問という営みの重大さに肅然たる思いを禁じ得ない。

さて、私が次に注目すべきだと考えている「現人神」論者は、東大教授で憲法学者の上杉慎吉である。その理由は、陸軍大学校教授をも兼務した彼の学説が陸

軍の正統憲法學說の位置を占め、昭和十年におきた「天皇機関説事件」を理論的に準備したと言われているからだ。

上杉は、同僚の寛克彦が大正元年十月に『古神道大義』を出版し、その中で神道多神教論を展開したのに対して、『皇道概説』古神道大義ヲ讀ム（『國家學會雜誌』第二七卷第一号、大正二年一月）を書いてそれに反論した。そして、ここで初めて自らの「現人神」論を公にした。

この議論の意味を鮮明にするために、まず上杉に批判された寛の議論から紹介しよう。

「古神道は多神教である。舊に神代に存在せし神神のみならず功績徳望の顯著なりし人人はいふに及ばず広くいへば此世を辞したる人人は一切之を神と認め得るのである。然のみならず現在人間として生活なさるる御方でも天皇陛下は神様であらせらるる、之を現人神と申し上げる。されば神道の神は絶対排他独占的の一神でなくして、各其分担の範圍を有せ

られ、天照大神と雖も神の唯一なる全部ではなく、総攬を権限となしていらせらるるのである」

この議論に対して、上杉は次のように反論している。「神々のうちに、各神が絶対的に憑依するの中心たる真神が在まさればならぬ。皆神ならば、皇道又は古神道は成立する筈がない。（中略）カミと云ふ者種々雑多なれど、所謂古神道を一の宗教なりとして、概念上神とすべきは唯一天皇、祖宗以来、一代には唯だ一人在ます、カミ御一人、絶対至尊の御方の外にはなしと申さねばならぬ。予は皇道の本義は絶対に天皇に憑依するに在りと云ふた。之を宗教とするは、神は唯だ此の御一方であるのである。神代の人皇道は成り立たぬ。さらに、彼は「家族の宗長として、祖先崇拜の考より服従すると云ふも足らぬ。現人神である、天皇なるが故に服従する。服従すべきものと信仰するが故に、崇拜服従する。信仰に理由はない」と、「家族國家」論も不

十分であるとして批判している。また、同じ論文の中で上杉は、「天皇に絶対的に帰依してその精神と合一するならば、有限を超越して、個人の圧迫や不安を解脱することができるといふのが古来の日本人の信仰であった」とも言っている。しかし、以前の彼は「君主も人間であるから悪をなし、憲法を踏みにじる可能性はある。それに対する保障が立憲政体なのだ」と主張していた（明治三十八年『帝國憲法』）。その彼が、何故このような精神の大転換に見舞われたかは重要な問題であるが、議論が脇道へ逸れてしまふし、紙幅の関係もあって省略せざるを得ない。興味のある方は、拙著『近代政教關係の基礎的研究』（大明堂）をお読みいただきたい。

### 「八紘一宇」論の出現

最後に、ここでもうしても、「現人神」とセットで語られてきた「八紘一宇」論

の出現についても触れない訳にはいかない。そして、その直接の起源、すなわち、『日本書紀』に載せられた神武天皇即位の詔の中に「世界統一」という思想が込められていると主張した人物を探っていくと、田中智学という明治後半から昭和初期にかけて活躍した在家の日蓮主義者に辿り着く。

田中智学は西南戦争をきっかけとして、「天皇を天照大神の延長である」と見るのが日蓮聖人の説であるから、日蓮主義者は天皇の徳と政治とが一致するように努めなければならない」と考えるようになり、日清戦争のころには、天皇を「久遠実成三身即一天照皇如来」「本法真付ノ繼紹血脉相承ノ聖體」「閻浮第一戒壇妙土大日本帝國輪聖王」などと称するようになっていた。

さらに、日露戦争直前の明治三十六年十一月には、神武天皇の敵傍御陵に自ら組織していた立正安国会の会員らを率いて参拝し、その傍らで「皇宗の建國と本化の大教」と題する講演を行った。こ

の講演は翌年四月に『世界統一の天業』と題して出版されたが、ここにおいて彼は、神武天皇の即位の詔に「天業を恢弘し天下に光宅す」とあるのは「世界を道義的に統一するという大理想」を示したものであり、その実行者が日本天皇であると宣言した。そして、日蓮聖人こそ、この天皇の天職を見抜いた指導者であったと説いた。

後に彼は、「神武天皇の建國」（大正二年三月）という文章の中で、神武即位の詔の中にある「掩八紘而為宇」という言葉を「八紘一宇」という四文字熟語に置き換えている。この「八紘一宇」が、智学の組織した国柱会などの運動が世間にひろがっていくとともに、天皇による世界の道義的統一」という思想を端的に表現した言葉として人口に膾炙していくことになったのである。

智学の三男であった里見岸雄によれば、世間に流布した「国体擁護」「反國体思想」「日本国体学」などの言葉も智学の提唱によるものであり、その思想は

軍部にも大きな影響を与えたらしい（『田中智学の国体開頭』）。特に、彼によつて日蓮主義へと導かれた石原莞爾は、闘争時代の幕切れに大闘争が起きるとする日蓮の予言と、自らの戦史研究の成果とによつて世界最終戦争を予想し、それに備えるために満州事変を計画した。満州国建國の翌月（昭和七年四月）、凱旋將軍の扱いで帰国した石原に、智学は「大日本國衛護の本尊」を贈ったという（西山茂『日本近代と仏教』『月刊アーガマ』一〇七号所収、平成二年一月）。こ

うしてみると、不思議なことに、加藤玄

智といい、田中智学といい、絶対的な「現人神」論の背景には強烈な仏教信仰の存在が見え隠れしている。

このようにして絶対的天皇が現れてきたのであるが、その言説が直ちに政府の公文書に反映されたわけではない。そこまで行くのにはなおいくつかの曲折があつて、その過程では三つの思想が大きな役割を演じることになる。

（次号へ）